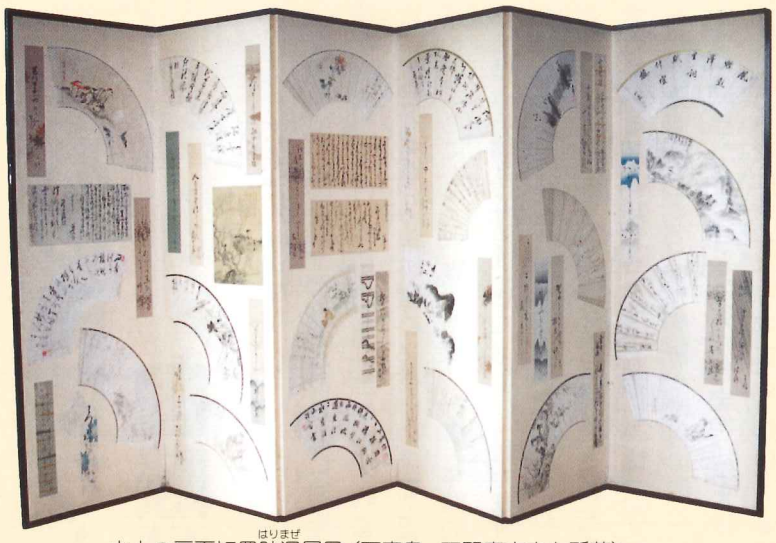
藤枝市史だより

第5号

平成13年8月27発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500（蓮華寺池公園内）
TEL 054（645）1100
E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

明治の俳諧グループ

―鶯後居士追福・俳諧五十韻―



文人の扇面短冊貼混屏風（下青島・石野嘉市さん所蔵）

青南町の田中茂さんのお宅の資料の中から、このほど「鶯後居士追福・俳諧五十韻」と題する俳諧（俳句）の資料が見つかりました。明治二十年に刊行された変体仮名で書かれた、木版一枚刷りのものです。

「鶯後追福五十韻」の五十韻とは、複数の人々が上の句と下の句を交互に詠みあい、絵巻物のようにその展開を楽しむ連句の形式の一つで、五十句を詠むものです。また、「鶯後」とは、江戸時代に染飯の茶店を営んでいた石野嘉市さん（下青島）のご先祖、甚蔵さんの俳号です。甚蔵さんは、天保八年に生まれ、庄屋などを勤めた後、明治二十年二月十四日に五十歳で亡くなりました。「鶯後追福五十韻」はその十ヶ月後に、俳句の仲間達が追悼の句会（座）を設けた時の作品集です。

発句　何も来ぬ跡を振り向く枯野哉　　鶯後居士
脇句　入り日は影を慕ふ冬空　　小雀
第三　一はやく北窓だけを塞ぐらん　　蓬宇
第四　紙番人の漉処言ふ　　近山
第五　別に又車の通ふ橋できて　　好友
第六　かこひのうちに育つ鶏　　花長
第七　明残る月にしめりし敷筵　　雲眠　（以下略）

というように、ここではまったく異なる五十人の人が、前の人の句を承けて次々に句を続けています。最初の句は、恐らく鶯後の生前の句から採ったものと思われますが、皆に先立つ寂しさを冬の季語「枯野」に寄せたと思われる句を詠んでいます。続けての句は、冬の夕景で親しい人を失った悲しみを詠んでいます。作者の小雀という人はよくわかっていませんが、句の位置からして鶯後と関係の深い人であることは確かです。第三句は、蓬宇という人の句ですが、この人は豊橋の人で、幕末から明治にかけて、藤枝周辺に力のあった宗匠の一人です。鶯後の遠い旅立ちに、そうはさせじとあわてて北の窓を閉ざす様を詠んでいます。この位置は会の展開を左右する重要な位置で、その展開を考えて句を作ります。冬の寒さを受けて、紙漉きの景に転じたのは近山という人です。この人は、増田姓の元田中藩士で、この時期、鶯後の石野家の近くに住んで染飯の茶店を営んだらしいことがわかっています。

五十韻最後の句（挙句）は、この会を取り仕切った蓬宇の、「皆うち寄りて惜しみあふ春」という、亡き鶯後を皆で偲んだ句で終わっています。

ここに句を連ねた人々は、みな鶯後居士の親しい人々だったのでしょう。地元藤枝の人だけでなく、島田や浜松の人も含まれ、女性も四人加わっています。

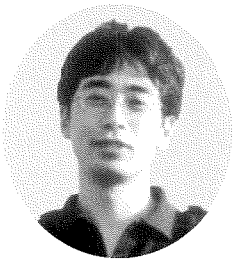
鶯後、甚蔵さんの法名は、広く学芸を好んだ人柄にふさわしい「三翁甚学居士」です。家の近くの菩提寺、新福寺のお墓には、「散るころに散れば美し芥子の花」という辞世の句が刻まれています。伝統的な連句の形式は、正岡子規が新俳句運動を展開したこともあって急速に衰え、一句を独立させた今日の俳句が主流となっていきます。「鶯後追福五十韻」を通して、明治二十年頃には藤枝の地域で伝統的な連句形式が色濃く残っていたことが分かりますし、また、青島地区を中心とした俳諧グループの広がりと、層の厚さを知ることができます。

文・近世担当調査委員　壬生芳樹

鶯後居士追福・俳諧五十韻（青南町・田中茂さん所蔵）

滝沢の田遊びと国際社会

民俗担当
市史編さん調査委員
谷部 真吾
慶応大学大学院
博士課程在学



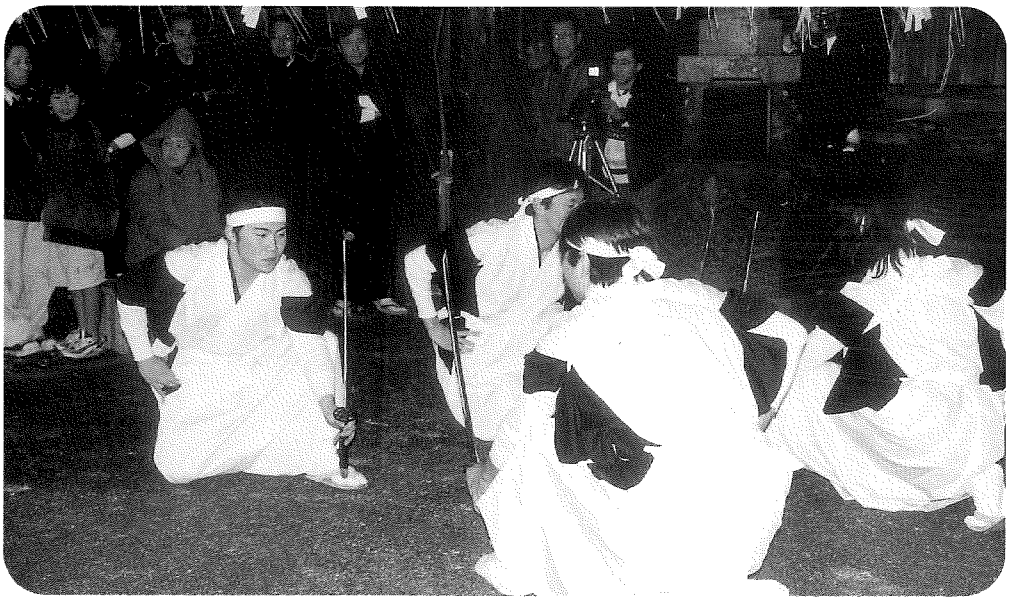
底冷えのする二月十七日。滝沢地区に鎮座する八坂神社の境内では、毎年、田遊びが奉納されます。一般に、田遊びとは、一年の始めに稲作の過程を模擬的に演じることによって、豊作を祈る行事（専門的には、このような行事のことを「予祝儀礼」と呼びます）のことを言います。滝沢の田遊びでも、「山田打」「田植」「孕五月女（はらみさおとめ）」などといった演目の中に、農作業を真似た所作を見ることができます。しかし、滝沢の田遊びを実際に見てみると、一見、農耕とは何の関わりもないような演目があることに気づきます。例えば「筏」や、「薙刀」「九字」などがそうです。これらは、猿楽や（修験道系）神楽の系統に連なる演目であると考えられています。このように、滝沢の田遊は、複数の系統に属する演目が混ざり合うことで構成されているのです。

滝沢の田遊びは、現在、「滝沢八坂神社田遊び保存会」の人々によって担われています。しかし、中には、保存会以外の人々によって舞われる演目もあります。例えば、「千万歳」「十六拍子」「田植」は小学生が、また「白刃」は当年二十歳を迎えた若者が舞を披露することになっています。保存会以外の人々が舞うことによって、どのような効果が生まれるのでしょう。一つには、地域社会の人々に自己の成長を知ってもらう機会であると考えられます。また、ここに挙げた四つの舞は、滝沢に住む男子であれば、基本的に必ず経験するものであるということから、世代を越えたコミュニケーションを促す手段にもなっていると思われます。要するに、小学生や二十歳の青年が舞うことによって、地域社会の中に人々のつながりが形成されるというわけです。このように、滝沢の田遊びは、一年の豊作を祈念するという宗教的な意味だけでなく、社会的にも意味のある行事なのです。

現代は、「国際化の時代」であると、よく言われます。確かに、日本社会はバブル経済の後遺症によって、不況であるとされながらも、日本人の海外旅行者数は年間千七百万人に迫ろうとしています。また、海外で活躍するスポーツ選手の姿を生中継で見ることもできますし、インターネットを利用すれば、世界中の情報を簡単に手にすることもできます。このような状況の中で生活していますと、これまで日本人が育ててきた文化、とりわけ地域社会の文化は「何やら古臭いもの」と考えてしまいがちです。しかし、国際化の時代だからこそ、自分たちの身の周りにある文化を見つめなおす必要があるといえるかもしれません。

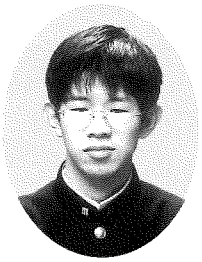
先日、海外旅行好きの友人がこんなことを言っていました。「欧米でも、アジアでも、みんな日本のことを知りたがっている。でも、日本人は自分の国のことをよく知らない。自分もそうした日本人の一人だ。」それ以来、彼は、日本文化の勉強に勤しんでいます。

国際化社会に生きる人間とは、国際事情に精通するだけではなく、自らも何かを発言できる存在でなければならないようです。国際化の第一歩、それは身近な文化を知ることから始まるということもできるでしょう。



「白刃」を舞う青年たち（滝沢八坂神社にて）

市史学習会に参加して



藤枝東高等学校歴史部
片山健太郎

荘館山古墳に葬られているのはどのような人物だったのでしょうか。

僕は平成十一年夏に見た荘館山二号墳石室入口の神秘的な雰囲気が忘れられません。あの石室入り口が僕の考古学への入り口だったかもしれません。

篠原先生のお話の中で、荘館山古墳の築造を契機に、志太平野の群集墳の築造が始まったと聞いたことが印象的でした。志太平野の群集墳の数の多さは目を見張るものがあって、荘館山を契機に群集墳が普及したとしたら、荘館山の築造は重大な出来事だったのかもしれません。時代は六世紀後半、なぜ前方後円墳が二基つづけて作られたのでしょうか。様々な疑問が浮かんできます。

考古学は歴史を組み立てるための学問だと思います。考古資料に何を語らせるか、また、何を語らせられるか、この点が重要だと思います。僕の考古学に対しての考えはこうなので、篠原先生の考古資料によって志太平野のあけぼのを考えるというお話はとても参考になりました。

古代担当委員の紹介

専門委員
山中敏史
独立行政法人奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター
遺物調査技術研究室長

出身地の焼津を離れて三十年が過ぎ、古代の都奈良の人となりましたが、故郷への思いをバネにしながら郷土の歴史を追求しています。藤枝では、志太・益頭郡の二つの古代の郡役所跡も見つかっており、こうした考古学の発掘調査成果も大いに取り入れることによって、古代藤枝の活き活きとした姿を解き明かしたいと思っています。

調査委員
佐藤正知
静岡県教育委員会文化課指導主事

藤枝は古代史の世界でとても著名な場所です。地下発見の文字資料や先人たちが残してくれた文化財のひとつひとつを読み取って、全体の復元を行っていきます。かけがえのない文化遺産を後世に確実に伝えたいと念じています。

特別調査委員
吉岡眞之
国立歴史民俗博物館教授

古代の文献を研究しているため、顧問の原秀三郎先生から文献史料の校訂を命じられました。一つは「駿河国正税帳」で、これは渡辺晃宏さんのお力により終わることができました。今は、厄介な問題がある「続日本紀」の校訂に頭を悩ませています。

特別調査委員
矢田勝
浜松市立西部中学校教諭

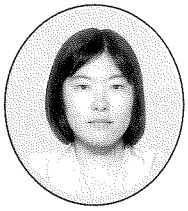
大井川平野の地下に条里型という古代～中世の方格状道路群がどのように存在していたのか検討しています。現状は近世以降の網状乱流で、ほとんど破壊されていますが、地籍図と発掘成果の分析により、かつての形状が復元できそうです。古地図をご存知の方、ご一報をお願いします。

特別調査委員
渡辺晃宏
独立行政法人奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター
資料調査室長

藤枝市からは、御子ケ谷遺跡・郡遺跡・水守遺跡など全国的に見ても有数の質・量を誇る古代の墨書土器が見つかっています。平城宮・京の木簡の整理・解読に携わっている日頃の経験を少しでも生かして、お手伝いができればと思います。よろしくお願いします。

調査補助員
岩宮隆司
大阪市立大学大学院生

私は、大阪に住んでいるので、静岡とは無関係のようにも見えますが、妻の本籍が藤枝だったこともあり、何度か訪れたことがありました。今回、市史編さんの仕事に参加させて頂くことになり、不思議なご縁を感じています。良い市史ができるようにがんばりたいと思います。



調査補助員
石毛彩子
四日市市教育委員会文化課勤務

これまでは、豪族の居宅などを素材に、地方豪族の経営や地方支配について研究してきました。藤枝市史では、御子ケ谷遺跡の墨書土器の分析を進めて、藤枝市に所在する二つの郡の関係や、それぞれの遺跡の性格について明らかにしたいと思っております。

瓦かわらばん版

市史編さん委員の紹介

編さん委員　新谷澤祥子
　　旧糟谷文江
編さん委員　新山下末治
　　旧井沢銓一

原稿募集

今回、市史編さんのために、埋もれている情報を寄せていただくよう、原稿を募集します。締め切りは12月20日。400字詰め原稿用紙5枚以内にまとめ、住所・氏名・年齢を明記し、市史編さん係まで送って下さい。詳しくは8月5日号の広報をご覧下さい。

市史学習会のお知らせ

と　き／10月13日(土)13時より
ところ／稲葉公民館　和室
テーマ／古代助宗古窯(こよう)の歴史的位置
講　師／柴垣勇夫(静岡大学教授)
募集人員／80名
入　場／無料
申し込み方法／10月1日より電話で郷土博物館へ

平成12年度の調査から

近現代

当時の旭光座のちらし

五十歳代以上の市民にとって、懐かしい思い出の一つに旭光座があります。今回は、資料調査で確認された旭光座のちらしを紹介してみます。博物館所蔵の平島村資料の中に「笑ひの覇王再び来演、曾我廼家喜楽会」「増産戦士慰安観劇会、剣戟王明石潮大一座」があります。「笑って養へ非常時の底力」や「町村農業会」「産報」などの記事から昭和十九年のものと判断できます。また「当地出身、歌川絹枝、特別加盟」にも興味がそそられます。

近世

平嶋村と上当間村との水争い裁許状絵図
貞享四年（一六八七年）

青南町田中久次さん所蔵文書によって、久兵衛・市右衛門請新田の開拓経過がよく理解でき、同町田中茂さん所蔵文書によって近世後期からの動向も知ることができました。平島の池田祐喜さん所蔵文書は、前年度に調査した横内・上当間・潮区有文書と合わせて、西益津・広幡地区の水問題などを考える上で貴重なものでした。高柳の松浦孝治さん所蔵文書は中新田の増田与太夫や白子の大塚家に関する文書が多く、幕末期の富豪と田中藩との関係を究明するために役立つものと期待されます。

民俗

『藤枝市史』民俗編の平成十四年春刊行に向けて、執筆を行いました。執筆に向けての調査では市内・外の多数の方々にお世話になり、ありがとうございました。

古代・中世

古代・中世担当では、清水寺において合同現地調査を行いました。清水寺には奈良時代の写経である縁生論、鎌倉時代の懸仏、戦国時代の今川氏にまつわる古文書など、貴重な資料が多く残されています。

加えて古代担当では、水守遺跡をはじめとする市内遺跡の墨書土器の調査などを、中世担当では市内に伝わる中世資料の現地調査を行うとともに『松平記』などの戦国期記録の「めくり調査」も行いました。

清水寺の調査風景

考古

昨年九月初旬に、古代に食器などを焼いた窯跡の助宗古窯跡で発掘をしました。今回の調査は、平成十一年度に行った踏査の結果をふまえて、細谷地区を調査対象にしました。灰原という窯の焚き口の前、失敗した土器などが捨てられている場所を選んで、試掘溝を掘りました。土器が多数出土し、坏・甕・壺・硯などの器種も豊富でした。

このほか、考古資料編に向けて、掲載予定の土器の実測と拓本をとりました。

試掘溝の発掘風景